火をおこそう

千葉市立加曽利貝塚博物館
〒264-0022　千葉市桜木町163
TEL043-231-0129

はじめに

マッチやライターのない時代、人間はどのように火をおこしていたのでしょうか？

いつの頃からか人間は、マサツ熱で火をおこす方法をあみ出しました。縄文人と同じく、マサツ熱による火おこしにチャレンジしましょう。

ユミギリ法の道具

↑ヒキリウス
杉などの柔らかい厚さ１cm位の板を使います。写真のようにV字形に切れ目を入れ、くぼみをつけます。

←弓
ヒキリギネにヒモを巻き付けて回転させるのに使います。

←ハンドピース
ヒキリギネの上部を押さえます。

←ヒキリギネ
太さ１cm位のウツギ・アジサイ・クルミの枝や、シノダケがよく、皮をむき、よく洗って乾かします。適当な長さに切り、軸木の先に差し込んで使います。先っぽがこげているのに注目。

←ホクチ
火種を炎にするために使います。これは麻ひもをほぐしたもの。

←葉っぱ
火種をほくちに移すために、ヒキリウスの下に敷きます。

マサツ熱

モノとモノをこすり合わせると熱くなります。これがマサツ熱です。身近なもので一番火がおきやすいものは、乾いた草木です。それらからマサツで火をおこすには、約450℃以上にしなければなりません。

マサツ熱を得るには、ノコギリのようにこする方法と、キリのように回転させる方法があります。回転による方法は、左の図のようなモミギリ法が基本ですが、かなり難しいので、ここではユミギリ法を紹介します。

火をおこす

下の写真のように道具をセットします。ヒキリウスの下に葉っぱを敷き、ヒキリウスが動かないように足でしっかり踏みます。

まず、ヒキリウスのくぼみでキネを回転させます。やがて煙りが出始め、粉がたまってきます。最初は押しつけながら回転させ、粉が十分たまったら、こんどは回転を速くします。

粉から煙りが上がれば、火種ができた証拠です。これをほくちで包み、炎にします。ほくちは、はじをつまむようしにて持ちます。ヤケドに注意しましょう。

道具の使い方

煙りが出始める

火種ができた！

火種をほくちに移す

ほくちを手に持ってグルグル回すと火がつきます